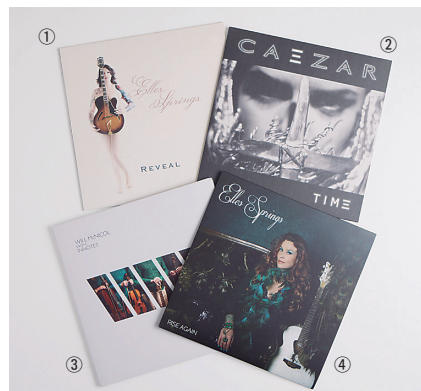




例えば、故ジョージ・マートインの子息であるジャイルズ・マートイン氏がビートルズのアルバムをリミックスする際に使用したのは、同社のMG-1PKGとPHONO-1M

- ヴァルテレ・レコード取扱盤**
 ①Elles Springs『REVEAL』(VER-001-ELLES)
 ②CAEZAR『TIME』(VER-CAEZAR001)
 ③WILL McNICOL with INNOCENT『VOLUME TWO』(VER-WMWIV2)
 ④Elles Springs『Rise Again』(10月20日発売予定)

折角なのでヴァルテレ・レコードの作品を少し聴いてみたい。ただひとつ断っておくと、ヴァルテレ・レコードは自社の製品を引き立てるために制作されたものではない。いわゆるハイファイを強調したような録音ではなく、メジャーではないがトラジ氏が愛するアーティストの音楽を世に残すことが目的なのである。そこを間違いないようにしたい。

1枚目はエレス・スプリングスというオランダ出身の女性シンガーソングライターのアльバム。素直なヴォーカルで当たりのいい声だ。少しだけロック・テイストを加えたカントリーで、純粹で暖かさを感じさせる歌声。リラックサした自然な音は、誇張がないだけに録音の素晴らしさがわかりやすい。続いてはギタリストで作曲家のウィル・マニコルと弦楽四重奏団のコラ

新たな電源とベースでMG-1PKG MK2をグレードアップ

ボ。これがまたあまりにもナチュラルだ。ワンポイント録音のように、個々の楽器の強調感がなく気持ちのいい音楽が流れている。この自然さがきつと、トラジ氏の音と音楽に対する本当のベイスになっているのに違いない。



**ヴァルテレ
MG-1PKG MK2**
 MB:¥2,750,000 (画像) / CL:¥2,530,000

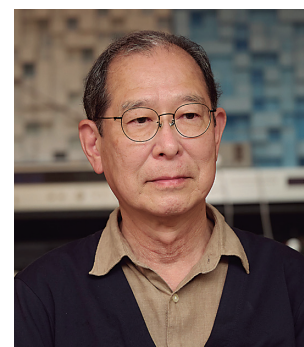
〈SPEC〉【本体部】●駆動方式:ベルトドライブ ●モーター:24極シンクロンモーター ●スピンドルサポート:アセタールボールベアリング ●モーターマウント:アセタールマウント(3点調整可能) ●プーリー:超精密アルミニウム合金 ●ベルト:精密研磨ポリマー ●メインベアリング・スピンドル:精密硬化ステンレス鋼(加工精度2ミクロン以下) ●メインベアリング・ハウジング:強化リン青銅(クリアランス6ミクロン以下) ●メインベアリング・ボール:超精密タンガステンカーバイド ●メインプラッター:精密加工アルミ合金/3mm厚アクリルインターフェース ●構造:20mm3層クリアキャスト・アクリル ●アイソレーションシステム:2コンプラント/1リジッド9デカップリングシステム ●脚部:アルミ合金製 ●フウフラッター:< 0.1% ●ランブル:< -85dB ●対応速度:33 1/3、45 RPM ●寸法:W468×H155×D385mm(アーム含む) ●重量:14.0kg【アーム部】●タイプ:TPA-ULS(トライビポット・アーティキュレイテッド) ●実行長:240mm/9インチ ●オーバーハング:17.5mm ●オフセットアングル:22.9° ●ヘッドシェル:アルミニウム合金 ●アームチューブ:カーボンファイバー ●ベアリングヨーク構造:アルミニウム ●ベアリングタイプ:窒化シリコンボール×3 ●カウンターウェイト:鏡面クロームメッキ真鍮/ステンレスT/Wアジャスト ●内部配線:VERTERE Pulse R ●重量:428g



●問い合わせ先:タクトシュツク Tel 042-316-9517

アビーロード御用達 ヴァルテレ「MG-1PKG」を 「LunA」「ISO-PLAT」で さらに進化させる

執筆●井上千岳 写真●松永 睦



今回は、オーディオ評論家の井上千岳氏に試聴を依頼

トラジの音楽に対する愛情と誠意
そして『ヴァルテレ・レコード』

ヴァルテレを主宰するトラジ・モグハダム氏は、長い間アビーロード・スタジオと深い関係を築いてきた。最高のレコードプレーヤーを設計するためには、レコードの制作現場を知らない

今回ヴァルテレのラインナップに新たに加わったのは、DG、そしてMGを冠するターンテーブルのグレードアップアイテムとなる専用電源「LunA」と専用プラットフォーム「ISO-PLAT」だ。著名なエンジニアからも愛用されているヴァルテレ・ターンテーブルであるが、これらが更に進化すると、一体どのような境地に至るのか。本記事ではMG-1PKG MK2をリファレンスに据えて、試聴していきたい。

さて、そこでそろそろ本題に入りたい。先の話にも出てきたMG-1PKG MK2。そのグレードアップ・ギアがテーマである。

MG-1はヴァルテレのスタンダードなモデルで、2022年にリニューアルされてMK2となった。ただ、スタンダードとはいえ一般的には十分にハイエンドである。ここからグレードアップすると上位機にSG-1があるが、本機種とは3倍近い価格差があるし、フラッグシップのRG-1はスーパーハイエンドだ。買い替えるとしても、簡単な話ではない。



本試聴は、本誌試聴室にて行なった

そこまでの無理をせずに、本機をできるだけ上位機に近づけたい。そういう目的で開発されたのが、これから紹介する製品2つである。ひとつは電源、もうひとつがベースだ。

まず、新たな電源となる「LunA」というモデル。付属のACアダプターに換えて、モータードライブに安定した電源を供給する。Imperiumというモータードライブのリニア電源部から派生した製品で、トロイダルトランスと高出力安定化回路を基に、最大4.5Aの出力を生成。ノイズの低減や電圧の安定化によって、ドライブの精度向上と精密回転が保証される。

もうひとつが、「ISO-PLAT」というベースだ。15mm厚の亚克力板2層を、シリコン／ニトリル製アイソレーター4個で支持。元々の吊り下げ型アイソレーション構造をいっそう強化し、SG-1のそれに近づけた形と言える。外部振動から遮断するだけでなく、内部振動の跳ね返りを抑える効果も非常に大きい。また、リア部にクリップ2個を装備し、電源ケーブルとフォノケーブルを固定することで、レコードにかかるテンションを開放することが可能だ。

先にMG-1PKG MK2だけの

壮絶な音響を展開する。情報をすっきり拾い上げた印象である。

**サウンドに更なる静かさを
もたらし、桁違いの精度や
存在感を表現**

そこで、まず電源をLunAに交換してみる。当然静かになるが、その鳴り方がインシュレーターなどとは違うのだ。S/Nが上がるというより、精度が高まる。暴れが消え、粗さが取れて出方がナイーブなものになる。こう

いう変化は、電源でないと得られない。

ピアノでは強弱の落差が拡大して弱音部はよりきめ細かく精密に、フォルテは強靱さが増してダイナミズムに富んだ再現が展開される。静かな曲を聴くと一音毎の粒立ちがいっそうくっきりして、細かなところまでニュアンスに彩られているのがわかる。そしてキーンと芯の通ったフォルテがすっきりと立ち上がってフォークスが明確になり、どの音にも「そこに存在している」という実体感が強く感じられるようになる。



ヴァルテレ
ISO-PLAT
¥352,000

〈SPEC〉●構造:キャスト・亚克力2層構造(15mm厚)●アイソレーション:シリコン/ニトリル製アイソレーター×4 ●レベリング:水平調整用脚部×4 ●設置面積:W454×D390mm ●ケーブルマネージメント:Pクリップ×2、ケーブル用ホール×2 ●寸法:W474×H55~65×D457mm ●重量:6.0kg



MG-1PKG MK2をISO-PLATの上に設置して試聴。4点分離型アイソレーションによって外部から伝わる振動や共振をケアだけでなく、脚部を調整することで精密な水平調整も可能だ

音を確かめておきたい。

元来非常にデフィニションのいい鳴り方で、どこにも曖昧さを残さない明快極まりない出方をする。まずレスポンスは均一そのものだし、輪郭も明瞭で崩れることがない。だからピアノのタッチがくつきりしているのは当然と言ってよく、弱音部からフォルテまで一切にじみというものを生じさせない。つまり、骨格が強靱なのだ。響きにも余分なものがなく、音を濁らせ曇らせる要素はほとんど入ってこないと言っている。

オーケストラは広大な周波数レンジを背景に、弦楽器を始め金管・木管など全てがキャパシティいっぱいに鳴っている印象だ。ことに低音弦のずっしりと厚く、しかも弾力のある手触りは、減多に感じることでできない部類に入る。ダイナミックレンジも広く音楽の起伏が豊かで、クライマックスでは瑞々しい弦楽器に金管の咆哮が加わり

るのである。

オーケストラは音場の見え方に大きな変化がある。全体が奥へ引いて、位置感がとてもリアルに感じられるのだ。低域の響きが引き締まってより深いところまで沈み、弦楽器のハーモニーは透き通るような響きの中に細かな表情の揺れが見えている。こうしたニュアンスの緻密さが、電源による精度の変化である。

次にベースのISO-PLAT。これも当然静かになるが、それがちょっと異次元と言ってもいいくらいの静かさだ。このためデティールのあらゆるところまで神経が行き届いている感触で、一音々々の正確さが違う。

ピアノは輪郭だけがくつきりしているのではなく、中身まで汚れなく出てくるのでタッチの肉質感が高い。また音の周辺からノイズがすっかり消滅してしまいい、立ち上がりや消え際の微細な抑揚がはつきり現れてくる。それがまた彫りの深いもので、音楽としての存在感がさらに違ってしまうのである。高域におけるフォルテの転がるようなき

らめき方など、ちょっと聴いたことのない美音と言っている。

オーケストラも瑞々しい弦楽器のハーモニーに厚み加わって、実体感が一気に高まる。低音弦の深さに肉質感が乗って手触りがずっしりと重さを増すが、濁りが一切被らないため全く曇ることがない。ダイナミズムが伸びやかに開放されて広大に高まり、音数がさらに増している。フォルテの中でも個々の楽器の音色がはつきりわかる。色彩の重なった厚みと言うべきだろう。もちろん解像度が圧倒的に向上しているのは間違いない。

ところでこの両者、順序を付けるならどちらが先だろうか。個人的には、電源を先にしてほしいと思う。その方が重要だということではなく、電源による精度の向上を味わってもらいたいのである。ベースはそれからでも遅くはない。これは誰が聴いてもすぐにわかる。

そして両方換えたときの違いは、1+1以上だということも付け加えておきたい。

〈今回の試聴盤〉
・『リスト:ピアノ・ソナタ ロ短調/パガニーニ大練習曲』
アンドレ・ワッツ (pf) (CBSソニー/SOCM85)
・『チャイコフスキー:交響曲第6番「悲愴」』
ジャン・マルティノ (指揮)、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(ロンドン/K15C8013)



ヴァルテレ
LunA
¥352,000

〈SPEC〉●内部電源:リニア電源 ●出力:30V DC ●電流:4.5A ●出力ケーブル長:1.45m ●寸法:W135×H54×D195mm(スイッチ、脚部含む) ●重量:1.0kg ●付属品:電源ケーブル



LunAの使用風景。ヴァルテレお馴染みとなる、精密加工された固体アルミニウム合金製の筐体が凛々しい。内部にはImperiumモータードライブのリニア電源部から派生した回路を搭載し、いっそう安定した電源供給を可能にしている